源　義　経

第四巻

村上元三

村上元三

源義経

第四巻

朝日新聞社

源　義経　第四巻

定　価　三三〇円

著　者　村上元三

昭和四十年十二月十日発行

発行者　朝日新聞社　足田輝一

印刷所　明善印刷株式会社

発行所　朝日新聞社　東京　名古屋　大阪　北九州

© 村上元三　1965

第四卷目次

雪中花……三
木隠れ陣……一八
風動く……二七
東軍西進……三七
宇治川の合戦……六六
動乱の都……一〇〇
夜に光あり……一二一
副将の座……一四五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

源氏日和……一五七
びるしゃな……一八〇
出陣の歌……二〇三
丹波越え……二二三
第一の戦い……二四六
一の谷……二六五
弓鳴り……二九四

装幀　橋本明治
挿画　木下二介

源義経

村上元三

雪中花

陽ざしが、いぶし銀のように曇ってきたかと思うと、木々の葉に小さい雫が光りはじめ、踏む足元の土に、白い粉をまきちらしたように、雪が降ってきた。

寒気はそれほどでもないが、夫婦親子とも薄着の三人の身には、その雪が、しみとおるような冷たさを与える。

ことに常磐は、ゆうべ都を逃れ出るころから風邪気味だったので、体内はほてりながら全身が震え、しきりに悪寒がし

ていた。
「いましばらくぞ。間もなく南都の堂塔の屋根が見えて参ろう」
夫の一条長成は、妻の身体をささえ、いたわって歩いていたが、それほどの降りでもないのに雪は視界を曇らせ、もはや時刻も日の暮れ近いし、なおのこと心細い思いをさせた。
だから長成も常磐も、うしろに続く一子の良成がいったさっきの言葉をほとんど忘れかけていた。
眼に残るのは、ゆうべ、法皇の御所法住寺殿が、木曾義仲の軍勢に攻められ、火を放たれた時の地獄のような有様であり、耳にこびりついているのは、軍兵の矢にかかって倒れた公家や侍臣のおそろしい悲鳴であった。
北国武者が、あとから追ってくるのではないか、という恐怖が絶えず襲ってきて、長成は、歩きながらときどき後を振返ってみた。
法住寺殿が兵火にかかったとき、摂政藤原基通以下の殿上人は、都を逃れ出て四散した様子だが、わざわざ一条長成を義仲の軍勢が追ってくる気づかいはない。
十年以前は、大蔵大夫に任ぜられたこともあり、平清盛の寵姫常磐を妻に迎え、良成と真砂という一男一女をもうけ、若狭の国司の目代として赴任したこともある長成も、現在は馬寮の役人にしかすぎない。
だが、その妻は常磐であり、常磐と左馬頭源義朝のあいだに生れた牛若という子が、十年も別れているとはいえ、いまは九郎義経と名乗っているということは、義仲も知っている。
それだけに、北国武者が妻を追うて来はすまいか、というおそれが、都を逃れ出てからも一

条長成につきまとっているのであった。
「ここは」
と長成は、前を行く下部に声をかけた。
「間もなく上狛かと存じまするが」
そわそわしながら、下部は答えた。
その下部も、ただ一人きりで、ゆうべ法住寺殿から逃げ出すとき、辛うじて長成が持ち出した手まわりの品を背負っているが、家は丹波にあるというし、あるじ夫妻が奈良へ向うと聞いたときも、いい顔をしなかった。
ここは、京から奈良へ通う街道で、左には山が迫っている。右手に木津川が流れているのだが、堤にさえぎられて見えず、水音も雪に吸い込まれている。
「父上母上にお願い仕ります」
うしろから良成が追ってきて、思い切った様子で声をかけた。
「お聞き願いまする」
横のほうへ来て、良成は、父母の顔をのぞき込んだ。
しかし、長成は答えず、常磐の身体をささえてやりながら、顔をそむけて足を運んでいる。雪を避けるというよりも、さっきの良成の言葉を思い出し、どきっとしたようであった。
常磐のほうも、市女笠を深く傾け、全身に悪寒がするのを耐えながら、よろめくように歩いている。
「父上」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

こんどは良成は、大きな声を出した。
「奈良へ参れば、もはや父上も母上のおん身もご安泰。案ずることはございませぬ。わたくしは、九郎どののところへ参りたく存じます」
しばらく長成は答えなかった。
「そなたまでが、戦いに」
ようやく長成は、弱々しい声でつぶやき、ちらりとわが子の顔を見た。
良成は、よくよく思いつめているのであろう、こわいような顔をしていた。一緒に暮してきたわが子の顔が、長成には他人のように見えた。
ことし良成は、十九歳になる。五十五歳の長成と、四十八歳になった常磐にとっては、もはや良成のほかに頼りにする者はいない。
清盛の寵のさめた常磐が、一条大蔵長成のところへ嫁いできてから、生れた子が良成だが、良成の本当の父は清盛だと噂する者が多かった。それについては気の弱い長成は、何も常磐にたずねようとはしなかったし、常磐も黙っていた。
おとなしい中に、時とすると、火のような激しさを示す良成の気性を、長成は、おそろしくさえ思う時がある。
「父上」
こんどは前へ回り、父の顔を見ながら良成は、はっきりとした声でいった。
「昨夜のことがあるまで、わたくしにも、戦いに加わりたいと思う心はございませんだ。しかし義仲の軍勢、院の御所に火を放ち、罪なき公家を射殺し、天台の座主明雲上人のおんいの

ちを縮むるを眼に致してより、わたくしの気持は変りました。源平の争いの中に、好んで身を投げ入れたい、と申すのではございませぬ。九郎の兄君のもとにはせ参じ、北国武者を都より追い払いたき一念のみでございます」

一気に良成は、そういった。

雪に顔を打たれ、ほとんど放心したような表情で、長成は、わが子の顔を見ていた。

年よりも長成は、ずっと老けている。権謀術策の多い公家の中で、かつては天下に聞えた美女を妻に持ち、それを重荷に感じながら、辛うじて生きてきただけに長成は、わが子のいまの言葉をおびえ切った気持で聞いた。

「母上」

常磐の顔をのぞいて良成は、さすがに口をつぐんだ。

常磐の頬に光る水玉のようなものは、雪ばかりではない。眼から涙があふれ落ちていた。おびえた表情で、常磐は、わが子を見つめたまま、足をとめて黙っていた。

その母の表情を見ているうちに、良成は、きりっと胸の痛む心地がした。母が若いころ、平家の手を逃れ逃れて、牛若をふところに、今若乙若と二人の子の手をひき、雪の中をさまよい歩いた、と聞いた話を、ふと思い出したからであった。

子との縁のうすい母に、今また自分が悲しみを与えるのかと思うと、さすがに良成も気持がひるんだが、わざと声をはげました。

「九郎の兄君は、軍勢をひきいて甲賀のあたりまで進んでおられると存じます。わたくし、これより道を東へとり、兄上のもとへはせつけまする。不孝には似たれども、せめて九郎どのの

許にあって、都を安穏の地に戻すため、根かぎり働きとう存じます。お許し下さりませ」
懸命に頼む良成を、父の長成は雪の中に立ったまま、途方にくれた面持でながめていた。
わが子の気持は判らぬではないが、太刀を腰に帯びているとは言いながら、良成は、太刀打の業も心得ず、弓も引けず、もちろん合戦の経験などはない貧しい公家の子であった。
「しかし」
と長成は、妻の横顔をちらりと見て、
「都へ迫ったる東国の源氏の軍勢、一手をひきいるは九郎の冠者というそうなが、それが遮那王か何うか、はきとも判らぬものを」
「相違ございませぬ。院の御所より使者を差しつかわされ、速かに都へ入って木曾の勢を討て、と命の下り給いし由、たしかに耳に致しました」
「九郎の冠者が、遮那王に相違なくばよいが」
愚痴っぽく、長成は、つぶやいた。
ともかく、奈良へ入れば安全と思っていた矢先、もはや木津川を渡れば奈良に近いとはいいながら、ここで頼みにするわが子と別れるのは、長成にとっては不安だし、良成が戦いに出るのを許してやる気にはなれなかった。
「ともかく、南都まで参ってからのこと」
ようやく長成が、そういった時だった。
急に良成は、きっと眼をすえた。京のほうから五人ほどの男が、雪の中を急ぎ足に近づいてくる。大きな野太刀を背負ったり、長刀をかついだ、武士とも何んともつかぬ風体の者たち

で、いずれも人相はよくない。
「おおい」
雪を横から受けながら、先頭に立った男が、長成たちに声をかけた。
「ご油断なく。追手やも知れませぬ」
おとなしい顔立ちの良成が、眉を上げ、父母をかばうようにして、太刀の柄に手をかけ、両足を張った。
追ってくる五人は、すぐに近づいた。
「都から逃れて参られたお公家か」
頬に髭を生やした男が、じろじろと三人をながめながら、へんな薄笑いを浮べていった。
「もはや陽の暮れ。このあたりは物盗りが出て物騒ゆえ、お送り申そうか。木津川の渡しには、木曾の軍兵の詰めてあれば、その身なりでは怪しまれよう」
「父上、母上、急ぎましょう」
その男には答えず、良成は、長成と常磐をうながして歩きながら、ちらりと不安そうに行手を見た。
この上狛を南へ行くと間もなく、木津川の岸へ出る。木津川は、吉津川とも呼ばれ、古くは山背河(やましろがわ)または泉河といわれていたが、伊賀の国に源を発するこの川は、飛鳥路、笠置などを経て上狛の南から、こんどは北上して淀河のほうへ向っている。むかしは、泉河橋というのが掛けられていたが、その橋もいまはなく、泉橋寺という寺の手で、渡し舟が出ているはずであった。しかし、その渡しに木曾義仲の勢が詰めているとすると、奈良へ入るのは容易ではなく、

すでに陽も落ちかけている。
「悪いことは申さぬ」
五人の男たちは、三人を取り囲むようにして、
「南都へ志すお公家衆を、今日はすでに五組、われらが親切に扱うて上げた」
何んの意味か、めいめい顔を見合せて笑った。
いずれも義仲の軍兵とは思えない身なりだし、三人ほどは酒くさい息をはき、笠の下から常磐の顔をのぞいている者もある。
物盗り、と良成は感じた。
「人の世話は受けぬ」
わざときびしい声で、良成は、足もとめずに五人をにらみ回しながら、
「われらは、木曾殿の家来に知り合いも多い。川を渡るに雑作もない」
「陽が暮れては、舟は動かぬ。だが」
と、ひげ面が、せせら笑って、
「おれならば、舟は出せる」
「退け」
良成は叱りつけたが、そのうしろで父の長成は、おびえ切って足をとめ、常磐の肩を抱くようにしていた。
木津川の水音が、ねずみ色の暮気の中に、はっきり聞えてくる。雪も暮色の中に溶け込んで、人の身体と道の上を白く染めていた。

「強がって後悔すまい」
ひげ面が、良成を見下すようにいった。
良成が気がつくと、五六間先に立っていた下部は、すでに一人の手で押えつけられ、担いでいた荷を奪われそうになり、声も出せずに震えている。
「おのれたち、物盗りか」
太刀の柄に手をかけて良成は、父母をかばいながら、懸命に声を張った。
「面倒な。引き剝いでしまえ」
ひげ面が、ほかの者たちに言いつけた。
「無礼者め、近よるな」
父と母をかばい、夢中で太刀を引き抜いた良成の構えを見ると、ひげ面は、一目で良成が腕に覚えがない、とわかったらしい。
「要らざる腕立てして、いのちを粗末にすまい」
ばかにしたように笑った。
下部は、もう荷を奪われ、雪の上に蹴倒されている。
じりじりと迫ってくる五人の盗賊の中に、常磐の顔を見て、眼を光らせている者もあった。もはや五十に近く、長いあいだの貧乏公家の生活で面やつれがしているとはいっても、天下に聞えた美女の面影は、まだ常磐に残っているし、暮気の中で年よりも若く見える。
その眼に気がつくと、夫の一条長成は、なおのこと恐怖を覚え、妻をかき抱くようにして、
「良成、手は出すまい。怪我してはならぬ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com